
A little Typyoone - 人形師 源十郎 -

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A l l i t t l e T y p y o o n e - 人形師 源十郎 -

【Nコード】

N 2 3 9 1 C

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

今回のヒロインはワールフ如月神無

彼と彼女と彼女の風景1（前書き）

CAUTION!

本作品と作者の趣味、及び性癖とは何の関連もありません

彼と彼女と彼女の風景1

「御主人様つ、待つて下さい」

朝のけだるげな雰囲気を吹き飛ばすほどの爽快な声が通学路に響き渡る。声の主は、小学生と見間違えそうなほどの小柄な身体と、見ようによつては耳のようにもみえる真つ赤なばかでかいリボンを頭の上で飛び跳ねさせながらある男を目指して爆走してきた。

「……」声をかけられた男、校則で定められた真つ黒な学生服をキツチリと着こみ、これは校則違反の長髪を後ろで無造作に束ねた丸眼鏡の長身瘦躯のその男は 後ろかからかけられた女生徒の声を黙殺した。

「御主人様つ！ 能登源十郎様つ！」

長い黒髪を風になびかせながら少女が そう叫ぶ、その声に含まれる一つの単語に彼らの側を歩く者達が振り返る。が二人とも特に気にした様子もない。

「……」呼ばれた男、能登源十郎は再びその声を黙殺し、不自然にならないほどに歩調を早める。が、しよせん彼女の走る速度にはかなうはずもい。長い黒髪の上で耳のようにも見えるいやに自己主張の強いリボンを頭の上にのせた少女が彼の元にたどりつくと、飛びつくようにして彼の耳元でささやく「ネークラでスケベで × で

な源十郎様ツ！ 今ならまだ許してあげますよお、これ以上私に恥をかかせると大声であることないこと言いふらしますよおーっ、と」

一つため息をつくると彼、能登源十郎はしぶしぶと立ち止まり自分の腕を差し出し、同時に少々タレ目ぎみの黒髪の少女の耳元で「何度も言うが、神無、御主人様はやめろ」と疲れたような声音でいうが、言われた彼女の方はお返しとばかりにそれを黙殺し、「今日のお弁当、楽しみにしておいて下さいね御主人様ツ」とことさらに最後の一言を強調して言い放つ。そして差し出された彼の腕に自分の

腕を嬉しそうに絡めると男を引つ張るようにして歩き出す。そして彼女の言うところの御主人様、能登源十郎のとげんじゅうさうに侮蔑、軽蔑、嫉妬などの様々な負方向の視線を投げかける通行人にしあわせそうな微笑みを振りまくことも忘れない。

これが能登源十郎のとげんじゅうさうと神無かんなと呼ばれる少女の朝の風景けふけいだった。

彼と彼女と彼女の風景2

その光景を熱っぽい瞳でじつと見つめる人影があった。

『噂は本当だった。』と彼女は思った。

能登^{のと} 源十郎^{げんじゅうろう}には黒い噂^{わかい}がある。

激烈なサディストである。というのがそれである。神無^{かんな}と呼ばれる少女を手込めにし、三流官能小説よろしく彼女を監禁調教し主従の関係を結んだというのがそれである。その噂を聞きつけて彼女はここにやって来たのだった。他にも様々な彼女を魅了するに足る悪い噂があった。そして彼女を見張ることほぼ一週間、彼の黒い噂の一つ一つを確かめ、そして今日でその確信は固まった。

衆人環視の中で自分の事を御主人様と呼ばせる剛胆さも素敵だし、その後に彼女の耳元で他の誰にも聞こえないように自分の奴隷に何事かを囁くという姿勢も素敵だし、彼は自分の理想に合致する。

「彼しかない」そばの電柱に自分の手形をくつきりとつけながら人影は思った。あの人こそ私の理想。神無^{かんな}というあの娘、あの娘のあの人に向ける眼差し、信頼よりなお深い愛情を通り越した盲従という名の種類の瞳。間違いないわ。彼こそ私の主人にふさわしい。彼なら私を導いてくれる。みんなには度胸がないのよ。幸福の価値観なんて人それぞれ違うもの。私は私の幸福を手に入れる。そうよ私は間違つてなんかいない。だってあの奴隷^こはあんなに幸せそうじゃない。そうなる過程なんてどうだっていいの、あの娘の姿こそが私の理想。私はあの人^{もちもの}の奴隷になるの。

嵐の前日 その1

その日、能登^{のの} 源十郎^{げんじゅうろう}は奇妙な物体を踏んだ。ごきり、と鈍い音がしたにもかかわらずそれはどこか陶醉した声で

「ああーっ！ もつと踏みつけにしてえ！」とか叫んでいた。

いつものクセで源十郎^{げんじゅうろう}は教室の扉の前でのたうちまわる奇矯なそれを冷静に観察した。長く伸ばすとあちこちに飛び跳ねそうな髪は短く切りそろえられている。全体的に小さめの目鼻立ち、やや小柄で胸のないことを除いても、いささか彼の趣味とは異なるが、まあ美人の部類に入れてよいだろう。ごきり、という最初の音は彼の靴の位置からして彼女の顎^{あご}がはずれた音ではないかと思われるのだが、その人物はというと平気で叫んでいる。彼としては彼女の顔から自分の足を早くどけたいのだが、彼女の細い腕のわりには以外にも頑強な力で自分の足首をつかまれているので、それもままならない。どうするか、とつい視線を上にあげる。と、横合いからの強い力で突き飛ばされた。

「きつさまあーっ！ 神無^{かんな}さんだけではあきたらずこのようないたいけな少女までその毒牙^{どくが}にかけおったかあ、この人間のクズめっ！ 貴様^{あなた}など生きている資格もないっ、今すぐにお前に引導を渡してくれるわっ！」

助かった。と思ったのもつかの間、そうわめきたてられてげんなりとする。のだがそれがあまり自分の表情にでないことを彼、能登^{のの} 源十郎^{げんじゅうろう}は知っている。一神無^{かんな}（通訳）がいれば、とも思うのだが、そもそも彼女が誤解の原因なのだから、彼女の説得は意味をなさなばかりか この場合火に油を注ぐ結果となりかねない。彼は目の前の男、格闘系のスポーツをやる者達に特有の雰囲気^{かふう}を熱烈に発散するその男をよく知っていた。柔道部部长、加納^{かのう} 虎次郎^{こじろう}である。というよりは“神無^{かんな}ちゃんをあの悪魔の毒牙^{どくが}から救おう同好会”の会長と言った方がこの場合 源十郎^{げんじゅうろう}とこの男との関係がわかりや

すいだろう。

「きえいやっ！」気合い一閃、目を爛々と輝かせ自分の正義に燃えさかる彼は自分より長身の源十郎げんじゅうろうの肩口をつかむと得意の背負い投げを放とうとして、くずおれた。その原因、彼の頭部を重そうなスポーツバッグで殴り倒した女を見て、加納かのう 虎次郎こじろうは困惑の表情のままくずおれていった。

嵐の前日 その2

「危ないところでしたね、御主人様っ」微笑んで、先ほどまで彼の足下でのたうちまわっていた女はそう言った。

「ふむ、ありがとう。というべきなんだろうな。この場合」意識を失ってなお自分の足首をつかむ男を見下ろし、その執念深さに感心しながらおざなりにそう言う。

「いいえ、当然の事をしたまです御主人様。お礼なんて私に首輪かいいめのしるしをつけてくださるだけでいいんです」言つてにこやかな顔で真っ赤な犬の首輪を自分に向かって差し出す。どうやら冗談でもないらしい。

「ふむ、人違い。ではないのか」にこやかに微笑んだままの彼女に向かつて疲れたように視線をむけるが、

「能登のと源十郎げんじゅうろうっ、二年B組」言つて彼女は胸のポケットから一枚の写真差し出す。そしてそこには間違いなく自分と神無かんなが写っていた。

「ふむ、間違いではないようだな。だがな、覚えがないんだがな」写真の自分が写っている場所にピンクのペンで「これが私の未来の御主人様っ」と書かれているの見てげんなりと言う。

「ああっ！ ごめんなさいっ！！ 一人で舞い上がっちゃって、でも近い将来そういう関係になる予定ですから別にいいですよ。それからこれはプレゼントですっ」一方的にまくしたて、さきほど柔道部部长を撃沈したズシリと重いスポーツバッグを彼に押しつける。と深々と一礼し時計を見「えっとあ、今日はもう時間がないんでこれ：あ、わたし北洋高校一年A組ほくよう 如月きんづき 葉月はづきといますっ、でもお好きに名付けてくださって結構ですっ。じゃあねっ、御主人様っ」と言い残すと、まさに一陣の風と化して彼女は遠ざかっていった。

曇天そして雨足は速く

能登のと 源十郎げんじゅうろうは実は学校で村八分にあっている。

能登 源十郎げんじゅうろうには彼と神無かんなとの関係がいわゆる御主人様と奴隷のそれであるという黒い噂わさひがあるからだ。その確たる証拠はどこにもないのだが、大多数が二人の - 主に神無側かんなの振る舞いから - そういう関係が事実であると信じ込んでいるためだ。そして今日の出来事は源十郎げんじゅうろうのその噂を真実として塗り固めるに十分に足る出来事だった。

源十郎げんじゅうろうは背後の教室から浴びせられる多数の視線を感じて、一つ大きなため息をついた。

「マあスタあーっ 一緒に帰りましょっ」

最悪 と呼べるタイミングで神無かんなの喜びに満ちあふれた声が廊下中に響き渡ったのは、その直後の事だった。

＊

能登のと 源十郎げんじゅうろうはため息をついていた。

部屋中に並べられたS M雑誌なんかでしかお目にかかれないうような道具類の一山（実物）を眺めての事である。

家に帰り着くなり、神無かんなが如月きさらぎ 葉月はつきと名乗る少女からもらったスポーツバッグを奪い取り開け始めた。

その結果としての産物である。

「九尾鞭ナインテイル？ 簡易組立型三角木馬セットお？ 『これでどこでもいつものプレイが楽しめます。』 う？ 動物用浣腸器？ 導尿力テール？ … もぐさにまち針にアルコールに脱脂綿、乗馬用鞭にスパ

ンクロッド、麻縄……」

いちいち数え上げるのも疲れたと言わんばかりの口調である。

「源十郎様^{げんじゅうろう}、説明していただきます」

一度出した物を嚴重にしまい込み、その上に座り込むと、彼女は彼を睨みあげるようにしてそう言った。

台風襲来 その1

「もらった」

いつものように彼の説明は簡潔だった。

「納得がいきませんっ、どこでどうやったら、こんなものをもらうような状況に出会えるっていうんですかっ！ ああ、源十郎様がこんな変態に育ってしまうなんて私の教育方針が間違っていたのかしら。…私、もう休ませていただきます。私はもう疲れました。いいんです。私なんてどうせ源十郎様のお荷物で役立たずでなんの価値もない女なんです。落ちついたら本家の方に戻ります。…それから源十郎様、いじめる方なら結構です。でもいじめられる方というのはいままでお坊っちゃんを育ててきた者として我慢できません。では源十郎様、お休みなさい」

憑かれたような足どりで出ていく彼女の背中を見送り再び彼はため息をついた。

*

天気は快晴だった。ただ彼の隣を歩く神無の周囲には黒い雲がわだかまっている。

「いいんです。どーせどーせわたしなんか…」と、ときもれなく呟く彼女に源十郎はいささか感心もする。

「あ、いたいた。御主人様っ、どうですか プレゼント気に入ってもらえました？ えっとお、今年のイブは満月なんですよ。知ってました。それでえ…その一満月の夜（イブの日）に窓一つない地下室で、それで虐めていただけたらって思っ。えっとおもちろん先輩も一緒にいいですよ」如月 葉月と名乗った。短い髪の小柄な少女はそう言ってくったくのない笑顔を二人に向けた。

「神無先輩、どうしたんですか。顔色悪いですよ。御主人様に叱られたんですか、それとも昨夜の調教がハード過ぎたとかっ？」
言って熱っばいまなざしを丸眼鏡の奥の瞳に向ける。

台風襲来 その2

「プレゼントお？」

「あつ、なるほどお 昨日私がプレゼントした道具をさつそく使われたんですね。神無先輩、どうでしたあ 燃えたでしょう」

「あれはアンタが？」

「そうですね、聞いてなかったんですか 今日から先輩と一緒に御主人様の奴隷同士、仲良くしてくださいねって、やっぱ奴隷同士のなれ合うのはいけないと思いますう？」

「源十郎様？」

「ふむ、なにも言っていないんだがな」

「私、源十郎様の噂を聞いてずつと憧れてたんですよ。それでいろいろ調べて。昨日お二人の姿を拝見してその関係を確信しました。私もそうなりたくなって思っ。ね、いいでしょ源十郎様」

「噂？」

「そうですね、源十郎様が激烈なサディストだとかあ、あんまり胸のない娘の方が好みだとかあ、ちよおーつと幼女愛好趣味っぽいとかあ、数々の素敵なウ・ワ・サ。それでえ私を導いてくれるのはもうこの人しかいないって思っ。ね、いいでしょ神無先輩」

「ダメっ」ようやくと事情が飲み込めてきた神無がにべもなく断る。

「えー、いいでしょお。だいたい源十郎様だってその為に神無先輩を作ったんですよ。」

「ちゃんと先輩は尊重するからさあ。やっぱさあ人形よりも生身の女の方がいいと思うのよ。ね、いいでしょお」

台風襲来 その3

「なぜ、神無^{かなな}が人形だと知っている」言^{げんじゅうろう}って源十郎が葉月^{はつき}に詰め寄る。丸眼鏡の奥で瞳が剣呑な光を放^はつ。

「えー、だってあたし人狼^{ハードウルフ}だもん、鼻が利^りくの。だからあ^{リベング・ドール}生^なき人形なんて作^{つく}って可愛^{かわい}がつている人間なら、容赦もなく私も可愛^{かわい}がつてくれるな^なって、そう思^{おも}って」

「人狼^{ハードウルフ}、ですって」その一言で神無^{かなな}のまわりに未だ漂^{ただよ}っていた暗雲は一転して雷雲に変わ^{かわ}った。ゆつくりと、如月^{きげん} 葉月^{はつき}を見^み上げる。

「そ、そおいうこと。ふっふっふっ初代、人形師”源十郎^{げんじゅうろう}”の最高傑作のこの私^{わたし}があなたのような小娘に負けるもんですか^か。だいたいねえ、源十郎^{げんじゅうろう}様は幼少の頃に出会^{であ}って以来わたしが丹精込めて育てあげてきたんですからね。それを今更あなたみたいにな^なわけのわからん小娘にとられてなるものです^すか。人狼^{ハードウルフ}だ^だというのならなおさら人間相手の時のような手加減も無用^{むよう}っ！ 剣^{つるぎ} 三十郎^{さんじろう}、来^きなさいっ！」

「神無^{かなな}」

「源十郎^{げんじゅうろう}様は黙^{もく}ってて下さい、これは女の戦いなんですっ」

「そう、じゃあ勝てば源十郎^{げんじゅうろう}様は私^{わたし}だけのものにしていいんですね」

「やれるもんならっ！」言^いって神無^{かなな}は自動歩^{じりつ}行^{こう}して側にきた鎧武者の中に姿を消^きす。

神無^{かなな}は人形である。神を越えることを欲^ほした初代 人形師 源十郎^{げんじゅうろう}が永遠^{えいゑん}の処女性をコンセプトとしてつくりあげ、神無^{かなな}と名付けた生きた人形。それが彼女の正体である。彼女自体には多少力が強い他はなんの能力^{とくえき}も持たない。

が、他の人形の中に溶け込むことにより様々な能力^{ちから}を発揮する。それが彼女^{かなな}である。

台風襲来 その4

「剣 三十郎、参る」

鎧武者がボソリと言って腰の剣に手をかける。

剣 三十郎、現在の源十郎、すなわち能登 源十郎が幼少の頃に作り上げた鎧武者であり、両親を亡くした分家の小倅にすぎない彼を”源十郎”の名を継ぐ最有力候補におしあげることとなった人形である。用途はその外見通りの戦闘用で、その身に様々な力ラクリを持つ。

「そんなからくりオモチャが役に立つもんですか。源十郎様は私にもらい受けてあげますっ」

言った如月 葉月の内側の筋肉が盛り上がる、肌の露出部分には獣毛が生え、頭部が狼のそれとなり唇からは犬歯がのぞく。

「ふむ、人狼というのは本当だったか」呑気に呟いて、賞品となった源十郎は無責任にもこのまま登校するべきかどうかを迷っていたが、迷う必要も別になさそうだった。目の前に柔道部部长、加納虎次郎がいた。

いや、この場合”神無ちゃんをあゝの悪魔の毒牙から救おう同好会”会長と言った方がより適切だろう。と柔道部以外の猛者達が集いだした周りを見渡して源十郎はそう思った。

「ふむ、用件はわかっているんだがな」彼らにそれを実行させてやる気はあまりなかった。

「そうか ならば話は早い、われわれ”神無ちゃんをお前のような悪魔の毒牙から救おう同好会”会員の全員は神無ちゃんの幸せの為に自分達の生命をも惜しまぬ覚悟である」そこで一息つくと集まった彼の同志の瞳の中に自分と同じ光を見いだし、満足げに一息ついて続ける。「よってその元凶たる能登 源十郎の抹殺を我々は決意

した」その瞳に悲壮なまでの決意を込め、普段は柔和で人好きのする顔を鬼のように歪めて彼は言い放つ。「これは昨日の事件によって能登^の源十郎^{げんじゅうろう}の悪行が確定したこともあり、第二、いや第三以降の被害者が出ないようにするための緊急措置である」言いつつじりじりと包囲の輪をせばめてくる。

「ふむ、一対多数^{げんじゅうろう}っていうのは卑怯とはいわないのか」とりあえず源十郎は言ってみた。

「おまえのような低俗な男にそのような配慮は無用っ！ 害虫相手に礼節など必要ないわっ！」あっさりと切り捨てられた。

「ふむ、こういうのは神無^{かんな}は嫌いなんだがな」さらに言ってみる。

「…、貴様から解放したあとでよく説明して納得してもらおう。正義は我らにあるのだ。誠心誠意、もって当たれば恐いものなどなし」苦渋に満ちた顔でそう言う彼らにもはや何を言っても無駄だと諦めた。

「かかれいっ！」

かけ声とともに野郎どもがわらわらと源十郎^{げんじゅうろう}めがけてやってくる。

台風襲来 その5

能登^{のど} 源十郎^{げんじゅうろう}は人形師である。そして彼が”源十郎”の名を継ぐ人形師であるということは、この場合 彼が人体の構造を知り尽くしているということの意味する。とくに経絡^{けいらく}とか秘孔^{ひこう}とか呼ばれるものに精通している。三人まではその場所を手持ちの針で刺すことで眠らせるなどして行動不能に陥らせた。だが相手は多勢、動いている的に正確^{まこと}に針を刺すのは至難の業だ。先ほどの三人にしても自分に組み付いて動きが止まった所でなんとか打ち込んだのである。そうやってさきほどから逃げ出す機会をうかがっているのだが包囲の輪はそのままで次の相手がその輪の中からのそりと現れる。自分を弱らせたところで確実に仕止めるつもりだと看破したが、だからといってどうなるものでもない。

「お館様になにをするっ！」

「御主人様になにする気っ！」

二種類の声が同時にその場に空から舞い降りた。かと思うと源十郎^{げんじゅうろう}の周りを囲む人垣^{はづき}をなぎ倒していった。いくら多勢とは言え突然現れた鎧武者^{かんな}と人狼^{はづき}にはなすすべもなく次々と倒れふしていく、そして最後の一人 加納^{かのう} 虎次郎^{こじろう}が「無念……」とか時代がかったことを呟きつつ倒れふした。

「ふむ、助かったか」

「御意」

「当然の事をしたまです。でもこれでけちがついてしまいました。神無先輩^{かんな}もう一度 今度は邪魔が入らないところで勝負です」言いながら人間形態に戻る。

「よかるう、その挑戦しかと受けた」

「どうでもいいんですけど神無先輩^{かんな}、その喋り方なんとかならない

んですか」

「まあ、それは仕方ない。神無^{かんな}の特質上、自分の溶け込んだ形代^{かたしろ}の影響を受けやすくてな」

「ふーん、ま、いいや、じゃあねっ御主人様っ」

答える源十郎^{げんじゅうろう}に片目をつむると、迅雷の速度で彼女は去って行った。

月に叢雲（むらくも）

神無は苦悩かななしていた。

「うー、源十郎様げんじゅうろうに一他の女（悪い虫）を近づけさせないためにバラ播いた噂のせいでこんな事になるなんてえ」

実を言つと能登のて 源十郎の数々の悪い噂をバラまいたのは神無かむちである。そしてそれを増長するような言動や行動を取ってきたのも当然 わざとである。

しかし、こんな展開は彼女の予想外だった。彼女の予定では他の女に相手にされなくなつた源十郎様げんじゅうろうが隣の美少女、もちろん自分の事である、に自然に惹かれてゆくはずだったのに。

「うー、失敗したようっ」抱え込んだ自分の頭の中でたで喰う虫も好き好きという言葉がぐるぐるぐるぐると回っていた。

加納かのう 虎次郎は苦悩うしろしていた。

「また、救えなかった」ボソリと呟いて彼、加納かのう 虎次郎は打ち込みを再開かななした。

初めて彼女の姿を見たとき、可憐かなという言葉の具体例けいぐたいれいを見た気がした。しかしすでにそのとき既に彼女は能登のて 源十郎の毒牙げんじゅうろうにかかっていたのだ。

背中、帯をまいた大木がぎしりと悲鳴のような音をたてるが気にもとめず、あの最低男をアスファルトの地面にたたきつけるつもりで思いつきりと打ち込む、みしりという音がするがやはり彼は気

にもしない。

能登^{のと} 源十郎^{げんじゅうろう}がどれほど愚劣な男か思い知ったのは、努力が実り神無^{かんな}ちゃんと初めてデートした時のことだった。

映画館で、ファミレスで、遊園地で、なにか事あるごとに彼女は電話していた。あの男のところだ。事あるごとにあの男に報告を入れて許可を求めていたのである、さすがに腹が立って彼女を問いつめてみれば「私のすべては源十郎^{げんじゅうろう}様のものですから」と言い放ったのだ。それもあの幸せそうな微笑みを浮かべて、だ。そして彼は決意した。彼女をあの男の魔の手から救い出そうと。

彼は知らない。彼とのデートそのものがちーっとも自分に惹かれない源十郎^{げんじゅうろう}様への当てつけであつたことも、たびたび彼女が電話して自分の居場所^{げんじゅうろう}を源十郎^{げんじゅうろう}に教えていたのも、源十郎^{げんじゅうろう}様が嫉妬にかられてその場にかけてくれるのを期待しての行動であつたことを。

滝のような汗を流しながらも加納^{かのう} 虎次郎^{こじろう}は打ち込みを続けていた。

嵐の到来

如月 おむらさ 葉月 はづきは吠えていた。

近所の犬どもが彼女の狼の声に唱和する。

月は満月にはほど遠いがそれでも彼女には十分だった。彼女は自分が変身する理屈を知らない。が変身できるという事実があればそれで十分だった。超常現象等を専門にしている雑誌などには月の光に含まれる成分のせいだとか、月の引力のせいだとかいっている。だけどそのどれもが彼女にとってどうでもいいこと、やり方を彼女の身体が知っているのだから、ただ 彼女は漠然と引力が関係しているのは確かかもしれないと、そう思う、確かに満月の日 自分の中の本性 オオカミのが出てきやすくなるのだ、何かに魅 ひかれるように。

如月 おむらさ 葉月 はづきは戦いの事を考えた。

実を言うと彼女は戦いがあまり好きではない。多くの人狼 ハードウルフが好戦的なのに対して自分はそうじゃない、その好戦的な血ゆえに暴走する者が多い中で彼女は変わり者だと言われた。しかし今度の戦いは自分から言い出したものだ。それに油断 ためらいは禁物、神無 あのこは、強い。

*

翌朝、能登 のて 源十郎 げんじゅうろうは玄関で、どこかで身に覚えのある感触を下に感じた。今回は心に多少の余裕があったので自分の足下で彼女の傷が再生する様子 さまを眺めることができた。
「うーん、この見上げる視界がなんともいえないっ」それは一言、そう言うとな残惜しそうにして立ち上がった。

「神無先輩、今日こそ決着をつけさせてもらいます」

「ふっふっふっ、今日は準備万端 早朝から源十郎様に身体のメン
テもしてもらったし、キツチリと返り討ちにしてあげるわっ！」

「そのまえに一言、ノーマル、なんだがな」

「そんなこと、もう関係ありませんっ！」二人に同時にそう言われ
て源十郎は天を仰いだ。そのまま二人に引きずられるようにして公
園に連れられていく。

「そこで源十郎様は黙って見ていて下さい、ちゃんと私が勝ちま
すからね」と二人に同時に言われるに至って、源十郎は抵抗をあ
きらめた。

「ふむ、女の戦いに男が口だしてろくな目にはあつたためしはない
らしい しな」それがただの女ではないとなればなおさらだ。と思
い、呑気に”賞品”と書かれた看板を持ち彼は見物を決め込むこと
にした。

嵐の中で

様子見 などというまだるっこしい事はせず。二人は真正面からぶつかりあっていた。源十郎げんじゅうろうの見たところ早さとパワーにおいて多少、如月葉月ハードウルフの方が勝るか、事実 何度も神無かなな、今は剣けん 三十郎さんじゅうろうが危ういところがあった。しかし決定的なところで彼女の方が力を抜く、どうやら彼女に決定的な一打を見舞う根性はないようだった。しかしそれは剣けん 三十郎さんじゅうろうの方とて同じ事、あまりに武士もののふらしい武士を作ってしまったので相手が女というだけでその鎧武者の剣先が鈍る。

「ふむ、体力勝負になりそうだな」

「その前に貴様が死ぬ」

後ろからたくましい腕が伸びてきて源十郎げんじゅうろうの首を絞めかかる。その腕に自分の手をかけて抵抗するが圧倒的な力の差で締め上げられる。源十郎げんじゅうろうの身体から力がぬけ、柔道部部长 加納かのう 虎次郎こじろうが止めを差すために体勢を変えようと力を緩めた瞬間すきまを逃さず。源十郎げんじゅうろうはその粗野な腕の中からの脱出に成功した。

「ふむ、結界を張っておいたはずなんだが……」首筋をなでさすりながら言う。あと、ほんのすこし首にかかった力が緩められるのが遅かったら間違いなく落ちていただろう。

「ふん、あの紙切れのことか、なんの呪いまじないだか知らんがそんな姑息な手段がこの俺に通じるかつ！」

結界、と源十郎げんじゅうろうは言った。がそれほどまでに劇的な効果をあげるようなシロモノではない。なんとなくそこに確かにある存在を忘れさせるといった程度のものだ。その場所に強く来たいという明確な意志力さえあればどうともなる。それにその作業現場を見られていたというならなおさらその効力は薄くなる。

嵐闘（らんとう）

「ふむ、前門の狼 後門の虎、どちらに喰われる方が楽かな」

「……」源十郎の独白には答えず。ジリジリと柔道着姿の男が前屈みの姿勢で詰め寄ってくる。

「ふむ、何度も言ったと思うんだが 誤解、聞く耳もたんとはかり男が突進してくる。」

「……なんだがな」間半髪くらいの差で避けて源十郎が言う。

「神無ちゃんともう一人の幸せの為に貴様を殺す」

「ふむ、そう思うからといってなにもこんな非常手段をとることもなかるうに」もう一人というのが彼、加納 虎次郎をさすのか如月 葉月の方を指すのかは判然としなかったが源十郎は本心からそう言った。

「きつさまあーっ、言わせておけば」

どうやら言葉どおりには受けとってくれなかったようだ。

「ふむ、……」ため息をつきつつ周りを見渡すが神無と葉月の二人は自分達の戦いに夢中で今回は援軍を期待できそうにもない。あいかわらず男は自分の射程距離までジリジリと注意深く間合いを詰めてくる。

源十郎はもう一つ大きなため息をつくと覚悟を決めた。

「きえいいっ！」と叫び声が上がると彼、虎次郎の天地がひっくりかえるのは、ほぼ同時の出来事だった。何が起こったのかはわからなかったが彼が、自分を見おろす源十郎とかいう下衆野郎に負けたことだけは厳然とした事実のようだった。

「好きにしる」言い捨てて彼はそっぽを向く、最高の間合いで会心の一撃を放ったのだ。それがはずされた今、抵抗は無意味だ。

「ふむ、では好きにさせてもらっぞ」言って彼の身体各所に幾本かの針を刺し、額に虎次郎にはわけのわからん記号の書かれた札が貼られる。

「だが、神無^{かんな}を救うとかいうのはどうする」

「ふん、潔くあきらめるともいうのか、残念だったな。確かに今日は負けたが次は大差で勝ってやる。手足の一、二本でも折っておかと貴様の命日はそれだけ縮むというものだ」

「なるほど、な…」その声と微かな甘い香りとともに彼の意識は心地よい闇に吞まれていった。その寸前、彼が見たのは苦笑と言う名の表情だったろうか、ありえない。この無表情男が自分に対して表情^{じょう}を表すという事態^{こと}は…。

台風一過

「ふむ、たったこれだけの動作でも身体に負担がかかるか」

言って源十郎はその場にへたりこむ。

「マスターあーッ、勝ちましたッ」どうやら葉月とかいう人狼は一度も神無に痛撃を与えられなかったようだ。いくら人狼とはいえ文字どおり無限の体力を持つ神無が相手では分が悪かったか。それでもやりようはいくらでもあったはずだが…。

「負けましたあ、って源十郎様どうしたんですか？」

「ふむ、ちよつとな」

「ちよつとな、って、ああーッ私をマスターから救うだのなんなのってしつこい男ッ！ てことは源十郎様ッ、ご自分に傀儡針をお使いになられましたねッ。あれは危険ですからおやめ下さいって何度いったらわかるんですかッ！ 文字どおり寿命が縮みますよッ！！」

人形師 能登 源十郎が人体の経絡秘孔等に詳しいのは既に述べられた事実である。傀儡針というのは針、札、香、呪言等を併用し生物の肉体、記憶を操る術の事である。源十郎は自分の身体のあるツボを針で刺すことにより多少人体のリミッターをはずしたのである。

が、そのような火事場の馬鹿力を出す事が身体に過負荷をかけることになるのは当然である。最悪 身体の各所に機能障害を起こしかねない。

源十郎の身体にはしる鈍い痛みは急激な酷使に彼の身体の各所が抗議の声を上げているのだった。

「今日という今日は許しませんッ、ご自分の身体をなんだと思ってるんですか、って 私に負けた葉月ちゃんッ、私に負けたクセに何エッチいっぱあい事してるのかなあッ！！」

「治癒ヒーリングの力です」

「治癒ヒーリングの力って、源十郎げんじゅうろう様の服ひっぺがして、身体中を舐め回すことがある？」

「そうです、外傷ならその場所だけでいいんですけど、内蔵の方はこうしないと、う、ううんっ」

人形師 能登のと 源十郎げんじゅうろうは逃げ出す力もなく ただ困っていた。

＊

加納かのう 虎次郎こじろうは困惑していた。たしかに自分はその憎つき男、能登のと 源十郎げんじゅうろうを尾行していたはずだ。それなのに今、自分は学校の柔道部にいて打ち込みの練習をしている。誰も自分がここにこうしていることに疑問を持ってないようだ。 > t - P B <

「練習中くんれんに白昼夢を見るとは、たるんでおるな」そう小さく独白すると「打ち込み終わりっ、乱取りを始めるっ！」気合いで心気一転してそう叫んだ。

その日 彼の練習はいつになく激しいものとなった。 > t - P B <

嵐の爪跡（あと）で

翌日の朝、神無かんなは不機嫌だった。

それは隣で自分の身体の各所を軽く動かし、ふむ、久々に身体が軽いとか言う能登のと源十郎げんじゅうろうのセリフに起因する。敗北感が自分を打ちのめす。彼女は源十郎げんじゅうろうの役に立たなかったのだ。役に立ったのは如月葉月きげんはづきだとか言う人狼ハードウルフの方で彼女は彼の身体を癒すのになんの役にも立たなかったのだ。

「やっぱり私、源十郎様のお荷物なのかなあ、こんな役立たずの生人形シングドールなんていらないよねえ、はあ」

「そんなことありませんってば、お姉様」

「お、おお、お姉様あつ？」

「私達あつての源十郎様でしょ、ねっ！」

「ふむ、ノーマルなんだがな」

「大丈夫ですって、男の方なんて根本は暴力的なんですから。と、いうわけでよろしく願いますねっ御主人様っ」

「そそそ、そんなことよりそのお姉様ってのはなによつ、それにアంతア負けたハズでしょつ、私にっ！！」

「ええ、でも気づいたんです。私別にお姉様に負けたわけじゃないってことに、私が負けたのは剣けん三十郎さんじゅうろうであつてお姉様という個人じゃないんです」

「あんだだつて人狼ハードウルフの能力フル活用してたじゃないっ」

「そうなんです、だからあの試合は引き分けて事で」

「納得いかなーいっ！ ふっふっふっ、こうなれば今度こそ真正正銘、息の根止めてやるーっ！」

「あつ、嬉しいなつ。さっそくイジめてくれるんですかつ！ なんていうかあ、真剣で斬りつけられるなんてえ、初体験はじめてでクセになりそうなんですっ」

「イ、イジめ・る・っ？」

「ええ、私 気がついたんです。 なにもお姉様と喧嘩する必要は別
にないんだって、えーとですね、将を射んと欲すればまずは馬から
という事で、お姉様さえ陥落してしまえば自動的に私は源十郎様^{げんじゅうろう}
のもの。 というわけで本日 只今より私はお姉様のものですっ」
「いーやあー げ、源十郎様^{げんじゅうろう}あ、助けて下さいー」
潤んだ瞳に見つめられて泣きそうになりながら傍らの男にしがみつ
く。

「ふむ、ま どう断ったところで、な」

「はいっ、昨日源十郎様^{げんじゅうろう}の身体を舐めつくしながらやっぱり御主人
様しかないって確信したんです。 という事でよろしくおねがい
しますねっ」

「ふむ、まあ どちらにしろお前の播いた種だ。 後始末には責任を
持つて、な」

「え”、源十郎様^{げんじゅうろう}、もしかして知ってましたあ？ あああ、あの噂
のでどっ」

「さあて、な」

「良かったあ。 これで私達の仲はマスター公認ですね。 お姉様っ」

「い、やああー……………っ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391c/>

A little Typoone - 人形師 源十郎 -

2010年10月8日15時32分発行